荒尾市立府本小学校　校長便り　№84

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年3月16日(月)

徒然 成功の鍵

最近思うことがある。人が何かを目指して活動する時、成功に辿り着くための条件があるように思う。次の3点だ。

①自惚れない
②謙虚である
③感謝の心

自分自身の若い頃、多くの人と衝突し、ご迷惑、ご心配をおかけした。少し成功体験をすると自惚れてしまっている自分がいた。戦略も何もなく、ただ闇雲に走っていた時代だ。当然のように謙虚さも無く、成功は自分の努力によってもたらされたものだと本気で思っていた。成功は実は他の皆さんがサポートしてくれていたからなのに、そういったことに気が付きもせず、感謝もせず本当に情けない自分だった。前述の3点、忘れないようにしていきたいものだ。

読書への誘い

さて、春めいてきたこの時期、私は好きですね。秋は「○○の秋」と言いますが、春も同じような季節だと思います。これから外で活動する人も多くなってくると思います。また、4月末からはゴールデン・ウィークに入りますが、ご家庭でも色々な計画があるのではないでしょうか。子ども達には外で伸び伸びと活動してほしいと思う澤田です。そうは言っても春は天気も変わりやすいです。そんな時は心の持ちよう。雨の日、最近の子ども達はすぐにゲームだ、スマホだと思考することをせず易きに流れますが、そんな時は読書です。私は仕事からの逃避も兼ねて、今から何を読もうかと、積読（つんどく）棚から探しています。

私たちの世代が子どもの頃は家庭用ゲーム機なんて無かった時代ですから、遊びは自分たちで工夫していました。空き缶一つとっても「缶蹴り」だけでなく、他にも多くの遊びを考えていたように思います。そこには主体性や協働性が発揮されていました。多くのものが溢れ、目の前にあらゆるものが揃う今の時代、想像力を働かせる場面が無く、主体性や協働性が発揮されにくくなっているような気がしています。話が飛躍してしまうのですが、私は子どもの頃に伝記を読むのが好きでした。初めて読んだのは「野口英世」でした。小学2年だったと思います。父が買ってきたのですが、読み進めていく内に、続きが気になって、1日で読んでしまいました。野口英世が幼い頃の火傷とその治療のこと、学問に対する熱意とそれを支える大人たち、研究とその功績等々、どの場面でも感動しながら読んだ本でした。

誰の伝記を読んでも、歴史に名を残す人たちは課題解決に対する主体性とバイタリティーに富んでいたようです。更に、それを可能とする相当数の読書と学習もあったようです。私自身の読書ライフを振り返りますと、小学生時代は伝記。中学時代は科学雑誌、高校大学は物語と専門書、最近は物語に偏向しています。漫画は今でも読みます。「ドカベン」「釣りキチ三平」「がきデカ」「まことちゃん」「バリバリ伝説」「北斗の拳」…

ここで話をもとに戻しまして、ゲームやテレビ等の情報は、視覚的且つ受動的且つ流動的な情報といえると思います。更にゲームやテレビは、主体性、協働性、想像力、創造力が発達するのを阻害します。雨の日は「読書デー」としたらどうでしょう。できれば「親子読書デー」なんてのは如何でしょう。親子の会話も増えるような気がします。「質の高い学び」は、主体性や協働性によって、知識やスキルを自ら学び取るという子ども達の姿から生まれます。読書増加によって、間違いなく「質の高い学び」に近づきます。

このような文章を書きながら、では私はどうかと考えた時、冷や汗ものです。いつ読書や親子の会話をしているのでしょうかねぇ。反省！　やりたいことが沢山ありすぎる澤田、寝ないで働ける体が欲しいと、心から願うばかりです。「息抜きのためにはよ帰ろう…。」と毎日呟く木曽澤田であります。

シリーズ「自分を語る」#84

さて、国際課での仕事は勉強にもなりましたが、非常に思い出深い仕事も出来ました。また、世界中に友人が出来たことも収穫です。その中の1人、韓国の研修員を受け入れる手続きが開始されました。

当事、熊本県は将来的な戦略のために、総務省が実施母体の「自治体職員協力交流事業（LGOTP）」に参加していました。当該年度に受け入れる研修員は、韓国の獣医さんでした。獣医さんではありますが、韓国の行政マンでもあり、熊本の畜産や防疫の技術を学びに来られるためでした。私は、「そうなんだぁ…」と納得しながら仕事を進めていました。

そんな時に、重大な事件が起こります。韓国で「鳥インフルエンザ」が発生したのです。それが重大な問題という認識が私には無く、粛々と事務手続きを進めていました。（本当は遅々として進みませんでしたが…）するとある日、熊本での直接の研修員受け皿である「畜産課」からストップが！　畜産課の担当者の言い分はこうです。「鳥インフルエンザが発生した国から、しかもその防疫の最前線にいる獣医さんを受け入れることは、県としてはできません。」そりゃそうでしょ、私もそう思いました。ところがこの事業、国家間の取組でもあり、そう簡単に受け入れ拒否はできません。それに、この獣医さんは派遣に際し、健康診断もきちんと受けて来られます。ということは、視点を変えれば人権問題にも発展しかねません（と私は感じました）。話し合いが平行線をたどる中、とうとう課長同士での調整となりました。するとどうでしょう、あっさり受け入れが快諾され、事務手続きがスムーズになりました。私は「在留資格認定証明書交付申請書」なる物の準備を進めており、そこからはスムーズに手続きが進んでいきました。当時、この申請書は福岡入国管理局に持参しなければならず、お隣に座っていたスペイン語の通訳さんに持参して頂きました。程なく許可が下り、研修員本人は来日となっていきました。LGOTPの研修員は来日後、東京でオリエンテーションを受け、その後、滋賀県にあるJAM（全国市町村国際文化研修所）にて日本語研修を受けます。その間は通訳が傍らにいらっしゃいますので、生活には事欠きません。来日直後、東京での歓迎レセプションでは緊張感もありましたが、にこやかに対面したことを思い出します。

そして6月、いよいよ韓国の研修員をJAMまで迎えに行く日が来ました。研修員受け入れ業務は、担当者である私だけで行わなければなりません。大阪まで飛行機、JRで滋賀県大津市へ。そこで研修員をピックアップし、帰熊です。研修員と出会うまでの間、韓国語の勉強に取り組んだ私澤田。研修員の名前は「崔　連撤さん」（チェ ヨンチョルさん）です。アンニョンハセヨ…、こんにちは、こんばんは、おはよう、おいしい…、何話せばいいんだよ～!?　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）